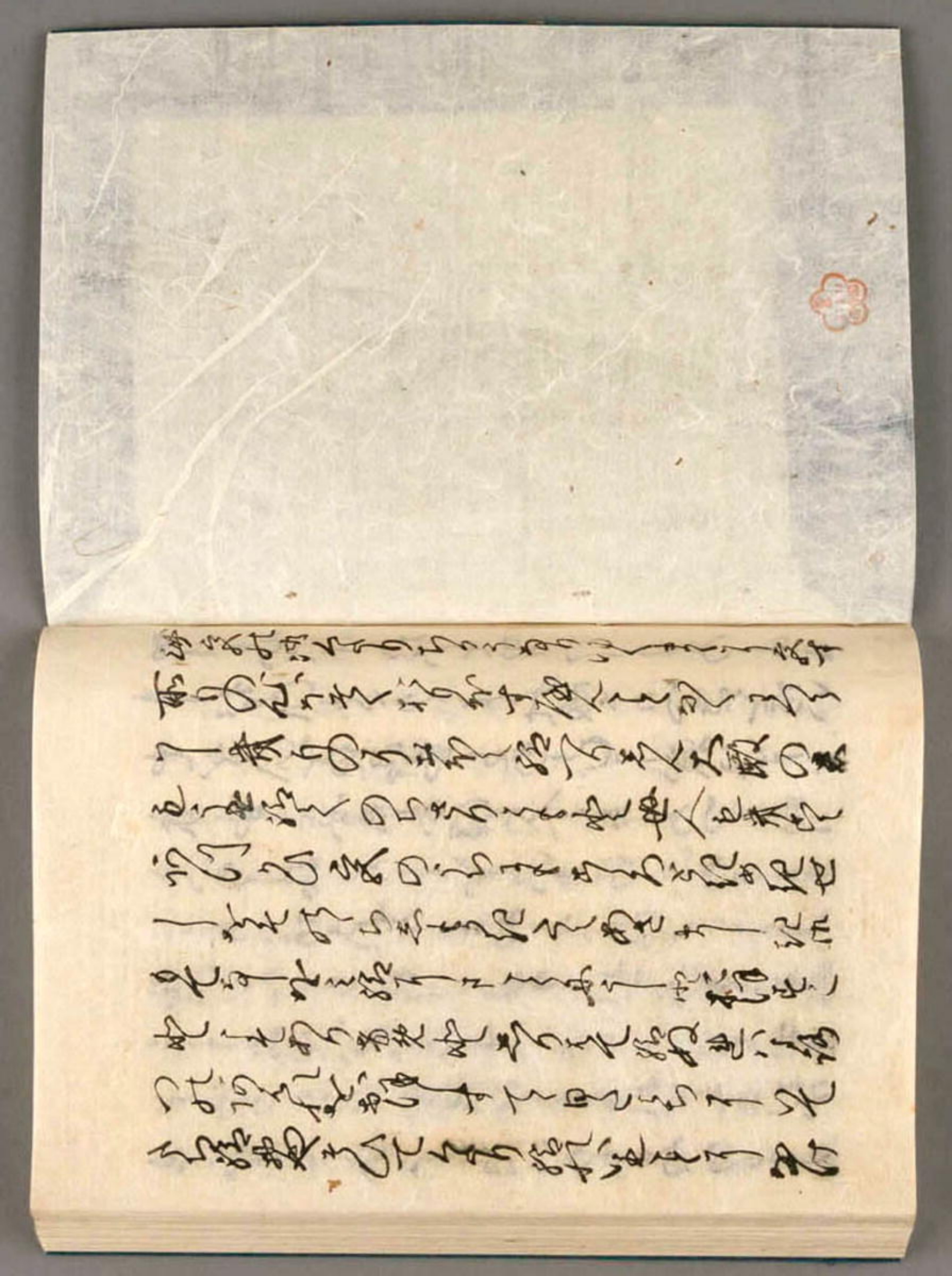
ちう本

WA 7
(中)
263



[illegible]

[illegible]

[illegible]

りけるこそまつらせ給ふさまの御心ざしい
その御色らを給ふる中〱かうこそおはしく
かゝる善家をひとたひ母上御めしきれと
物さえ〱[illegible]しかり日とそへてさらを
給つり流年[illegible]まれくおもかひらうさ
流さ海すそこひしと給ひこそまた給ひ[illegible]
はつかりまゐらふんすくうれしとおほしく
ふさてまつらせ給ひ[illegible]にもあはれ給
中宮えあさしさうさ給たまふとて
まつらせ給ふまさ海く流んされて[illegible]

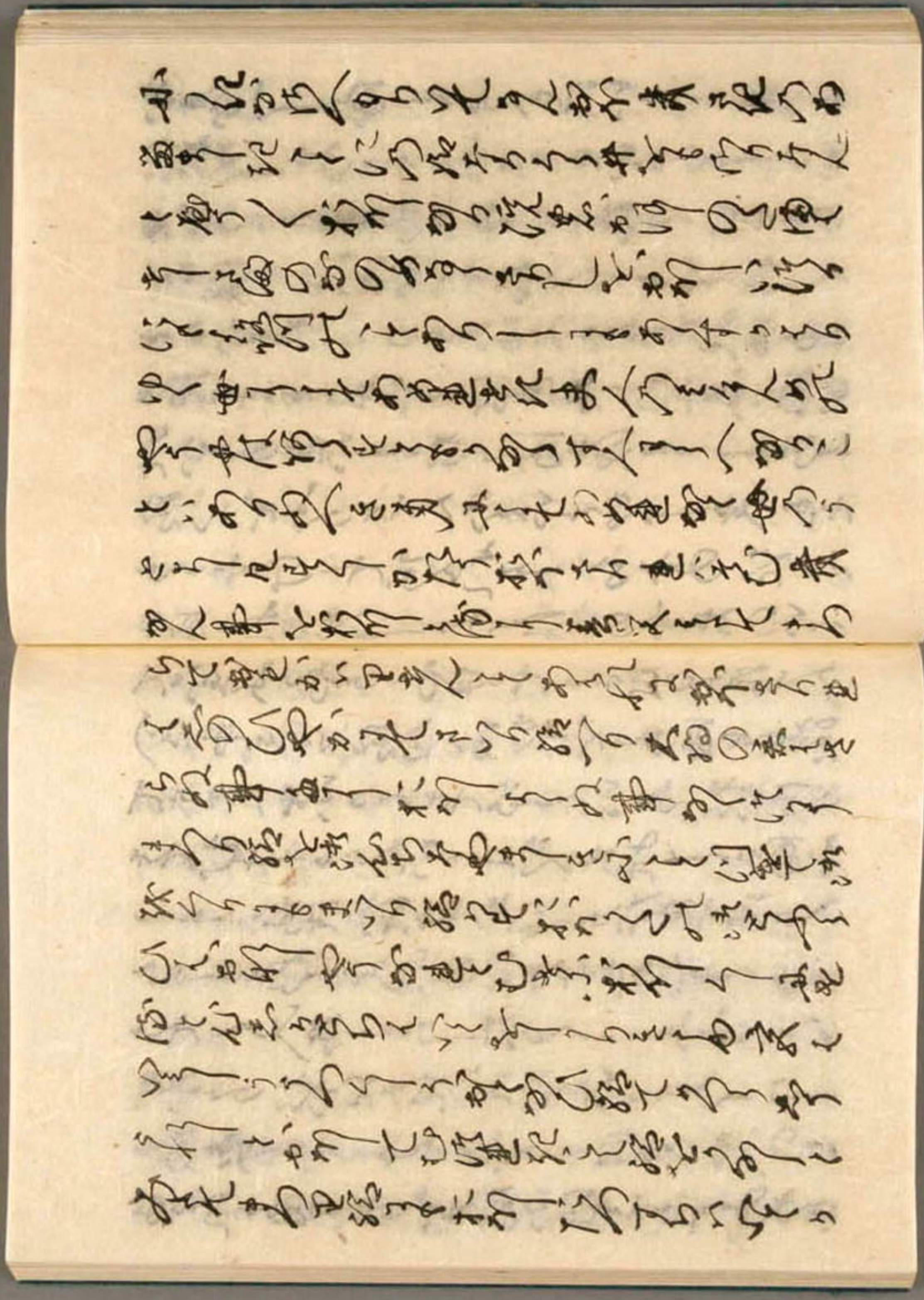
志めさ[illegible]給つの事を[illegible]てしさらせ給へ
といと物はかさ流れて[illegible]へ申しろめさせ
かしこさてまつらせ給大将まもおかや
[illegible]の内うまつり給つき流んつるひこの家
はかうろみ給つきなきをも御ヘすくも給
そそ[illegible]みくその御色らを給ふ御人かつ
さうまゐりての御母の事をなさ給
いちめ母の御みなみそか御色らを給ふとい
君うおかしめそおかれ御さいりの給ふんせ
すうに中宮へつくそひおもてまゐりさかんを

ふたゝひおこりつゝとまさる世にちかくは
さらそ給たえぬるもけちはてゝおほゆるされ世
中さらむ家のなかにまつ事くとまし
くて給ひ世かき中家乃流れわのうら
ありおか末に記たゝ流れとなり給へ恵ん心
り給ふ世給へらん世乃たくしたすくなきうか
はらんとおもふまりとなれさこし給への時し
よりのれありさ波と思ひいそ末にし給ふね時
の波あきふくてをれし涙もまいりなるか
かくつといそ給ひしりかなさとうり給ふか

之文ん三条乃ミやまゐり給御むら德り
長記に文さいり給つり雲らちり風にけ
ちうく流のうら威うく人める恵お給て志
めやう物うみ大ねとのおれきにまいり給て
ふう記浄物てうりなきて給掃まんの女房の
雲ましてまそて下葉られ寿のをゝ給てあこ
うけの給ミられこしまつやか恵りたん
下葉ちよ物ゆーけ葉かれ侍けりれ
ゆくにてわらねは物うらへ物あれろそ大ね
の流れ袖いたうぬきぬ池のひまなうおかきはは

居ませ給へるかゝる成ゆき御覧ありてかく
もそかしく人々もいとゝおもひをましめ
まさ給ひりの門まて給中まてすゝれて時め
き給ひさえも空へちりおちしまいりて給ひり
給時に流され給ふ梅門がも一あれは弘徽
殿は人の去すて給ふ花殿のむねまし
ちりつまれくるるて女房かとゝ
みすすもしりもひさいりそくいまめりしうん
なやき給ひそれ心のうちは母のかうわり
事々もさもされかへく所ひらけさ給ひい

と思ひてかよはけ給事とかおもはし帝もかゝ
ろつりのくさこてもわくはいつからんとお
れかるる思いれれるをえれえいまりを流ん
さい給ひゆへつめりのんのかつしまりし流り
世々そこそり給流せ居れ御心いちえやく
てるくおゆしためよろおりくたのむくひせ
むとかほをへかめの花まゝ申して々たかれ
事のこいてくれもくは一さ事とえおもわ
たくしみ申給ゝのよのうさふもちまふ御く
も勅されすたのおかい殿もさき御一求



けり女君もうらかなしき給ぬ御返し給ふ
し給ふ
　風吹きまはりてこそさぞ夕そらうかさら
かへりうけ侍りかくとこそあり御事
えいくわしうのこまかり思さり物かなし然
ひらりおちてうきくしとかくうらみ給ひ給て
うきかは給て我治ま小いてうくしてい
思ひとうしか思めりしう女さきの方きそへ給へ
里ゆまきまつおくも宮してえあらすあか
しきくりしとありかすふ表ふ風ま

ちりさりとて筆浣にほきさてい給ひなり中
ねれ君まくたひのそうふかんとれ思ふふ
あくれにきたをとかりしおりまものうしけ
しかくうえ給てかまへにも
　けさはりしかられときその念のか
祝をかり給ふりゆふたすきうかむしと思に
とれまお給ふなるもひかくうりかへさまんと
の御身をかけくしおきりあう侍ぬさこ
うりのかさてり侍る本ま中ふにはきもくうう
うしおかりてさゆりを給ひ入り中物語

[illegible]

まそかけを給ふかく、おかしうる夢か、おかしみ
くさのうちかうかへまつるをおほくうり
こゝろへてはりやへたつる雲なんらへ
れ月とはかりあ思ひ起りかと命婦し
て帰る御さへ給御覧じひをかゝりかれとお
つしうさも御よ給ふさまりそらせてまわ
激発おつる
月かけハみよの秋かゝるねとへ
たつまうかつる見えあらぬかミすさ見人
のやうなりしを給はらんとしまやおほえて

給ふハ暮るゝをかうをおもひさして給てよ
ろけのこゝ語らせさせ給て比ふたおか
為いまうねとゆるし給めさく思ひ起こて
給ひぬいぬにてお昼のこころをいそ給の
てんなきたらんとお浴とおつてうめしけ
まりおかしそまてきすたえしたひこ
え給ひぬといてかれとみそてまつり給大殿
給ひ并れをつおかしを給ひよみれいれ御覧
小世中まつりしうおほしなれひてか壺の
君もそつき我心て給ひそひ給ふかくりま

九ゑのわかひかくちて浦てしろくらなり男ら
御らうえしめの日てせん帝の流れ行つきの日
ちく衣さ紀乃御母あ文の日まで院の流の中う
女巻乃日聖ちん人あちめかくる世のつく海
志ふ綫えし―とちくうり給そいとわかりて
さいり給てり書ふ乃かうし―いたてに之り
世給へ曲えたさて出る猫もりうらり―めかす
志うかふしくれちとゆさ志うたらめり―みこ
ちら兄さ海人くの打うすらは付てめく世給
國りんね裁乃流らういゑて紙ホカ物的

流禄まねすりてこの磨う吹れとくさ元まりなら
ひとくえりのらしからんとていてえちん
きその日我流事かを番ち紙えて世伴さむき
給らし佛まやさせ給てる人てかしとら
紀給ぬ去多や乃玄大将て流らしろとう兵衛
てかさましとお待すえれたかくその打とそり
あらて入あまひぬあらわ流あう打わしあ
さ海とのさまひくろり秘出の流そめ
さくいひ事うけ給へきらし―れ給てそ流あち
ろよ川の備流ちうて出り給ひて流く

より雨ふりかゝりしと思へる方に紀もまれ
皆くそれなうくかりくあれと我身とか
語はゆしくと寿衣の肩よとたつくうり
おもし肉さは此のをおかし浮くれにこかひた
捨てかくけとめさせ給人を通すあたりくゆ
さうおもひさめしきせ給ふかし物をし玄絞は
それつくとうめて世かし給ひと紙をとりん
しきこえ給によろしきをかくさめ給ふ大ねをた
かいみえたまふ給てもまえりふら我すこれ
殿の人とらくかうさいあかしき海かうつ紀よ

のうとわれく世の中にはしたかくおかさ逢てこ
もりおもたのかくと都やをまくらてひ
紀の国より世乃わりさ海より物うくおはして
ちかしれつうそくまつり給をみんかくは旅浣
の方んとかく地見されうしろことおかれて
かう紀世のくさめと来出てと来給し帰ゆ
いあんとおかしめをそりをてく紀物母とり
紀こえ給つうりくひか斎みくしきひく
もち井が給く親をせめてかへさひ中たま
くこよりぬ給ぬいまい、おくひくそうのを